

実践的な文型指導について 副詞（句）と前置詞句をどう扱うか

松野 達

More practical ways of teaching English learners at an elementary level in 'five sentence patterns'

Toru Matsuno

Abstract

This paper focuses on better ways to understand English easily for students who are not good at English. In Japan, 'five basic sentence patterns' have been traditionally used to comprehend how English sentences are made up. However, the basic rules are not sufficient to understanding English sentences correctly, especially ones with phrasal verbs or idioms. Here it is suggested that a phrasal verb or an idiom should be regarded as 'a single transitive verb' and that this way will help learners to easily understand the structure of English sentences.

Key words : 英文法 5文型 句動詞 イディオム

はじめに

大学の演習で英語の基礎を学び直す学生のために、英文法のやり直しや、再確認をする機会が多くなっている。その際に基本5文型を使って文の構造について説明するのだが、その手法のみでは、正しい構文の理解には不都合な場合が多い。特に副詞（句）や前置詞句を伴う英文においてはそうである。そこで、副詞（句）と前置詞句を伴う例文の解析を通して、英語の苦手な学習者または初心者にとってわかりやすい文型分類の方法を考察する。

1. 基本5文型の概要

学校文法で構文理解のために文型の指導を行う場合、基本5文型を使う。これは主語 (Subject : S), 動詞 (Verb : V), 目的語 (Object : O), 補語 (Complement : C) の組み合わせによって、英語の単文を5つの型に分類したものである。以下に文例を示す。

第1文型 The war ended.

S V

第2文型 My brother is an artist.

S V C

第3文型 Children like sweets.

S V O

第4文型 I gave her a ring.

S V O O

第5文型 They think Bob honest.

S V O C

5文型の基本原則として、SVOCを構成する要素は、名詞、動詞、形容詞であり、副詞(句)や前置詞句などは文の要素には入れず、修飾語(句)(M: modifier)という扱いになる。以下に例文をいくつか挙げて、基本法則に則って文型判断を行ってみる。

(1) a. Mary is here.

S V M

b. John lives in New York.

S V M

c. John belongs to the baseball club.

S V M

例文(1a)・(1b)・(1c)において波線部はそれぞれ、副詞、前置詞句であるから、文の要素とはならず、(1)の文例はいずれも第1文型ということになる。

次の例を見てみよう。

(2) a. I am interested in science fiction.

S V C M

b. Mary is afraid of barking dogs.

S V C M

(2a)・(2b)の文例は、基本的な文型判断では、波線部が前置詞句であるから、文の要素には入れないので、いずれも第2文型と見なされる。

次の例はどうだろうか。

(3) a. People often regard dust as a big nuisance.

S V O M

b. I can't accept her story as true.

S V O M

(3a)・(3b)の文例も、基本的な文型判断では、波線部が前置詞句なので、文の要素には入れず、いずれも第3文型と見なされる。

2. 基本5文型の問題点と解決への方策

前項で基本的な文型判断法則に従い、SVOC方式を使ってそれぞれの例文の文型判断を試みたが、果たして文意を正しく理解するのに有効であっただろうか。例文(1a)・(1b)・(1c)を改めて見てみる。

(1) a. Mary is here.

S V M

b. John lives in New York.

S V M

c. John belongs to the baseball club.

S V M

先に述べたように、基本的な文型判断に従うと(1a)・(1b)・(1c)では波線部は修飾語句となり文の要素とはみなさない。では波線部がない以下の文はどうであろう。

(1) a' *Mary is.

b' *John lives.

c' *John belongs. (*は非文を表す)

ご覧のように文として成り立たないのである。この時(1a)・(1b)・(1c)の文型判断は本当に〈S+V〉で良いのだろうか。

ここで、一般的な学習者用文法書を見てみることにする。江川(1991, p.186)は、上記のよ

うな場合について、以下の例を挙げて説明を加えている。

She lived happily.

He lay on the sofa. (波線はいずれも筆者)

(以下引用) 2つの文を単に She lived. および He lay. とすると、文としては成立しない(少なくとも非常にまれな文になる)。(中略) このように第1文型はS+Vではあるが、副詞語句が必要不可欠になる場合もあることを知っておいてよいであろう。

と文型の判断には一定の注意を促している。

これとは別の綿貫他(2000, p.35)による学習者用文法書を見ると、

(以下引用) 完全自動詞を使った文につく副詞的語句にも、これを取り去ると文として成り立たなくなるものがある。いわゆる付加語A(Adjunct)である。

Mother is in the kitchen. (波線は筆者)

(中略) ふつうの修飾語(M)と区別して、特に付加語Aを必要とする第1文型を、〈S+V+A〉として第1文型の特別な形とすることもある。

綿貫他(2000)はここで一歩進んで新たな文型の提案をしている。綿貫他(2000)の考え方はそれ以前に発表された安藤(1983, 2008)に依るところが大きいと思われるが、ただの〈S+V〉にとどまらないその考え方はとても重要である。この有用な提言から30年以上経った今でも文型指導のスタンダードの地位にないのは大変残念である。

その一方で、(1c)に関しては、〈S+V+A〉

とする説明には、納得いかない部分もある。(1c)の意味は、「ジョンは野球部に在籍している」であるから、文型判断を以下のように考えることもできるはずである。

(1) c' John belongs to the baseball club.

S V O

“belong”は前置詞“to”を伴うことにより、「…に所属する」という他動詞的働きをする。実際、“belong”の使い方を指導する場合は、ほぼ“to”を伴う使い方での指導を行うので、“belong to…”をひと固まりとみなし第3文型の文と考えるほうが理にかなっている。さらに言えば、SVOCを文型判断に使う目的が、正しく構文を理解し、正しく英文の意味を捉えるためだと考えると、(1c')の考えの方がその目的にかなっている。次のような場合にもこの考え方は有効であろう。

(4) John looked at the dog.

S V M

(4)の文は「ジョンはその犬を見た」という意味で、基本5文型に照らすと第1文型だが、“looked at…”と動詞+前置詞(verb + preposition)で「…を見た」という他動詞的表現と言える。そこで、“looked at…”をひと固まりとみなすと、

(4)' John looked at the dog.

S V O

と、第3文型の文と考えられる。(1c')と合わせて、このように動詞+前置詞で、ある意味を表すものに関しては英語の苦手な学習者や英語初心者にはひと固まりとみなして指導するほうが有効である。この方法が有効であると考

える理由は、他の形にする時にも有効だからである。ここで (1c) を疑問文へ、(4') を受動態へと形を変えてみるとそれぞれ以下のようになる。

- (1)c" Which club do you belong to?
 (4)" The dog was looked at by John.

上記の例は、それぞれ動詞 + 前置詞の形を維持したまま形を変えている。これを前置詞 (句) を切り離れた <S+V+A> という文型に分類するのは、なぜ動詞の側に前置詞が残るのかの説明がつかない。さらに (4") に至っては、<S+V+O> の形でなければ、受動態の文にさえできないことになる。このことから、動詞 + 前置詞で、ある意味を表すものに関しては、ひと固まりとみなして指導するほうが有効である。

同様に動詞 + 副詞 + 前置詞 (verb + adverb + preposition), あるいは動詞 + 名詞 + 前置詞 (verb + noun + preposition) など数語の組み合わせで一つの意味をなす句動詞 (phrasal verb) の場合も以下のように扱うのが有効であろう。

- (5) a. They did away with those old laws.
 S V O
 b. They took care of my sister.
 S V O

(5a) の句動詞部は「排除する」、同様に (5b) は「面倒をみる」という意味を持つので、固まりでひとつの動詞とみなし、<S+V+O> とするのが理解しやすい。

さらに前置詞句を伴うものではないが、動詞が副詞を伴って一つの意味を表す場合もやはりひと固まりとみなすのが良いであろう。

- (6) a. John went away.
 S V M
 b. I don't stand out.
 S V M

それぞれの文で、波線部を副詞だからという理由で切り離してしまうと、(6a) は“went away”で「立ち去った」という意味を表せず、(6b) では“stand out”で「目立つ」という意味が浮かび上がってこない。そこで以下のように、句動詞もひと固まりとみなして指導すべきである。

- (6) a' John went away.
 S V
 b' I don't stand out.
 S V

前項で挙げた (2a)・(2b) の英文にも再び目を向けてみたい。

- (2) a. I am interested in science fiction.
 S V C M
 b. Mary is afraid of barking dogs.
 S V C M

品詞に目を向けて文型判断をすると、上記のようになるが、それぞれの文の意味を考えると、(2a) は「私はSFに興味がある」であり、(2b) は「メアリは吠える犬がこわい」となる。そして、(2a) で使われている“am (be) interested in…”は「…に興味がある」という意味の動詞 + 形容詞 + 前置詞 (verb + adjective + preposition) であり、同じく (2b) は“is (be) afraid of…”で「…をおそれる」という意味である。

先に挙げた安藤 (1983, 2008), 綿貫他 (2000)

は〈S+V+A〉を提唱した経緯と同じく波線部を文成立のために不可欠な付加語 A (Adjunct) とし、〈S+V+C+A〉を追加文型として提唱しているが、正しい構文理解のために効果的な文型判断については、以下の方が適切ではないだろうか。

(2) a' I am interested in science fiction.

S	V	O
b' <u>Mary is afraid of barking dogs.</u>		
S	V	O

動詞＋形容詞＋前置詞をひと固まりとみなす妥当性は（1c'）の場合と同じく、疑問文にした場合に以下のようになることから分かる。

(2) a" What are you interested in?
 b" What is Mary afraid of?

（2a"）・（2b"）共、波線部のように前置詞までを含んで疑問文を形成するからである。したがって、指導をする場合は、動詞＋形容詞＋前置詞で意味をなすものについては、初めから動詞句として指導するべきであろう。ただし、この第3文型の文は、目的語があっても、受動態への書き換えはできない。なぜなら（2a'）はもともと受動態から派生したものだし、（2b'）は afraid が形容詞だからである。

（3a）・（3b）の文例はどうだろう。

(3) a. People often regard dust as a big nuisance.

S	V	O	M
---	---	---	---

b. I can't accept her story as true.

S	V	O	M
---	---	---	---

（3a）は「人はたいてい塵を大変なやっかいものとみなす」、（3b）は「彼女の話は本当だ

と認められない」という意味である。基本的な文型判断では、“as”以下が前置詞句なので文の要素とみなさないが、（3a）においては [dust (is) a big nuisance]、同じく（3b）では [her story (is) true] とみなすことができるので以下のように〈S+V+O+C〉の第5文型と考えることが可能である。

(3) a' People often regard dust as a big nuisance.

S	V	O	C
---	---	---	---

b' I can't accept her story as true.

S	V	O	C
---	---	---	---

“regard A as B”, “accept A as B”などの用法は、英語初心者や英語が苦手な学習者にはやや難しいかもしれないが、〈S+V+O+C〉とすることで理解しやすくなる。

むすび

基本5文型による構文判断と、それに伴う問題点と解決への方策を試みたが、従来の文型判断の考え方だけでは、英語の構文を正しく理解するという本来の目的を十分に果たしていないことが分かった。また、副詞（句）や前置詞句を機械的に修飾語句とみなしてしまうことに問題があることも分かってきた。これらを踏まえると、英語が苦手な学習者や英語初心者には、句動詞や自動詞＋前置詞、またはbe動詞に続く形容詞＋前置詞などを一つの他動詞とみなして文を理解することが、有効な手段であることは間違いない。

句動詞や自動詞＋前置詞、be動詞＋形容詞＋前置詞をひと固まりの表現として英語初心者や英語が苦手な学習者が知るべきであろうことは、世界的なベストセラーになった Murphy, R. and Smalzer, W. R. (2009) の文法学習書において、何章にもわたって、よく使われる実例が

示されていることから、その重要性がわかるであろう。

参考文献

- Murphy, R. and Smalzer, W. R. (2009). *Grammar In Use Intermediate* (3rd ed.). New York, NY: Cambridge University Press.
- 安藤貞雄 (1983). 『英語教師の文法研究』大修館書店.
- 安藤貞雄 (2008). 『英語の文型－文型がわかれば、英語がわかる－』開拓社.
- 池上嘉彦 (1991). 『〈英文法〉を考える』筑摩書房.
- 江川泰一郎 (1991). 『英文法解説』金子書房.
- 大岩秀紀 (2013). 「文型指導の問題点とそれに代わる指導法について」『徳島文理大学研究紀要』86, 27-35.
- 風早寛 (2010). 『速読英単語 入門編』(改訂第2版) Z会出版.
- 金澤俊吾 (2003). 「言語学的見地からの英語教育における文法指導に関する一考察」『岩手県立大学宮古短期大学部研究紀要』14 (2), 90-103.
- 金谷憲 (監) (2011). 『読んで覚える英単語【発展編】』桐原書店.
- 谷光生 (2010). 「五文型と五文型 plus」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』33, 337-344.
- 綿貫陽・他 (2000). 『ロイヤル英文法』(改訂新版) 旺文社.